慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	地理学的研究の対象と課題
Sub Title	
Author	小島, 栄次
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1940
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.10 (1940. 10) ,p.1711(373)- 1739(401)
JaLC DOI	10.14991/001.19401001-0373
Abstract	
Notes	皇紀二千六百年慶應義塾大學部設立五十年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19401001-0373

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

地理學的研究の對象と課題

小島榮次

はしがき

本誌第三十卷第一號所載の拙稿「地理學の本質と地理的環境に就いて——經濟地理學方法論に於ける一斷想」に於いて、筆者は地理學的研究の對象及び課題に關し、その見解を述べたのであるが、その後數年の間に筆者の見解はかなり變化した。この變化は過去に於ける筆者の思索の不備と誤謬とに對する自覺にのみ原因するもので全く恥づべき次第であり今後斯かる過誤を繰返すことなきやう切望するのは勿論である。然し乍ら筆者の淺學菲才よくこの事なきを保し難い。そこでこゝに再び本誌上をかりて、現在までに筆者の到達し得た見解を述べたいと思ふ。敢て讀者諸賢の叱正と教示とをお願ひする次第である。

尙こゝに地理學的研究と稱するのは、嚴格に云へば地理學的地理研究の意であり、地理學理論に從つての地理研究である。地理研究には地理學理論を顧慮しない實用的研究があり、それと區別さるゝものである。また地理學的研究には地理學理論の研究も含まれ、この地理學理論が即ち狹義の地理學であつて、こゝに地理學の研究對

象及び課題としなかつた所以である。他方、地理學的地理研究としなかつたのは、この言葉が聊か異樣に響き、餘りに瑣末拘泥的であることを虞れたが爲めに他ならない。

一、地理學的研究の對象

地理學的研究は地域的個性の闡明をその究極目的とする。抑々地理學の本源的出發點は、人が地域的差異に注目し諸地域の事情を知らんとする欲求を起こすことにあるのだから、吾々の求むるところの主眼は、或る地域の事情全般にわたる詳細な知識ではなく、その一域を他の地域から異ならしめて居る事情にあると云はねばならぬ。勿論吾々は單に諸地域間の差異點のみを知らうとするのではなく、さうすることに依つて、謂はゞ夫々の地域の本體を摑まうとするのである。從つて或る二地域乃至數地域間の差異を求め得たところで、吾々の目的は達せられない。何となればそれに依つて吾々の知り得るところはそれ等地域間の差異に止まり、個體としての夫々の地域を正しく把握し得ないからである。吾々は夫々の地域を他の一切の地域から異ならしめて居る事情を、即ちそれを明かにすることに依つてまさしく個體としての夫々の地域を正確に把握し得るやうな事情を求めねばならぬ。これは明かに、吾々の求むるものが各地域の個性だといふことを意味する。

地理學的研究は斯かる究極目的を持つが故に、從つてその研究對象は地域であると云はねばならぬ。この地域なるものは、特定の地表部分を地盤としてそこに分布する諸現象の綜合體であつて、地理學はこゝに獨自の對象領域を持つと云ひ得る。（註一）

然し乍ら地域の個性を正確に把握し明瞭に表現するが爲めには、この地域なる綜合體を綜合體なるが儘に全體として觀察することは許されない。（註二）吾々はこの綜合體をその構成要素に分析して觀察を行ふ必要がある。地域の構成要素は、そこに分布する諸現象に他ならぬ。諸現象はその地域的分布なる面に於いて地域の構成要素となり從つてまた地域的個性の素材となる。故に地域の構成要素として諸現象を觀察することは、即ち地域的分布の觀點より諸現象を觀察することを意味する　換言すれば吾々は、諸現象の分布狀態を觀察し、それに依つて地域的個性を探求しようとする。それに反して「地域を構成する諸要素が地域と云ふ對象の形成素材としての役目を勤める關係から抽象して考察されるとき、其れらは最早地域の見點から觀られた現象、即ち地理現象として認識されることが出來ず、或は化學現象として、或は生物現象として研究對象となる。」（恒藤恭、文化現象の地理的認識――その一般的基礎について、經濟論叢、第二五卷第四號、一四〇頁）從つて他の專門諸科學を成立せしむるとも、地理學なる獨立の一學問を成立せしめ得ない。

註一、地理學理論と地理學的地理研究とを包括する廣義の地理學の獨自の對象領域である。

「地理學が地球の表面に自己の研究對象を見出す可きであり、しかもその對象は他のいかなる科學によつても固有の研究對象とされて居ないものたるべきであるとすれば、その統一的、綜合的全體性において觀られた地球表面が地理學に留保された研究對象たる外はない。（中略）地球表面を構成する諸要素をば統一的全體としての地球表面から抽出し、その各種別の見點に隨つて考察する所の他の諸科學、例へば岩石學、動物學、植物學、氣象學などとは違つて、地理學の任務は、

地球表面を構成する諸要素をば斯かる關係に即して認識すること、すなはち其れらの諸要素により構成された儘の統一的全體としての地球表面を研究對象とすることに存すべきである。今、斯く觀られた地球表面を「地域」と呼ぶならば、地域の構造及び形態を明かにすることが、常に地理學の目的たる可く、地域こそは地理學にとつてその獨占的支配を承認される領域たるであらう。」（恒藤恭、前掲論文、一三九―一四〇頁）

註二、分析を行はずに全體をその儘に把握することは、直觀的乃至感覺的には可能かも知れぬ。然し乍ら斯かる把握は客觀性を缺き、從つて科學的だとは云へない。

斯くの如く地理學的研究が地域を對象とすることは、結局に於いて地域の構成要素たる諸現象を對象とすることであり、更に換言すれば、地域的分布の觀點から諸現象を取扱ふことである。然らば諸現象は如何なる性質を持つ場合に地域の構成要素となり、從つてまたその地域的分布が觀察されるか。

先づ第一にそれは地表乃至それに近接した場所の諸現象でなければならぬ。地表の諸現象の生成に關與する天界或は地球内部の諸現象或は地球の運動の如きは、それ自體としては地理學的研究の對象とならない。何となれば地域は地表の諸現象から成る綜合體だからである。抑々地理學の出發點は地域的差異への注目であり、それは地表に於ける種々雜多な現象の共存に依つて刺戟された結果である。地球の表面は「日光及び空氣が地球と接觸する面であると共に、人生に有用なる種々の作用が地球の内部から人間の行動の場所に到達する面である。」（恒藤恭、前掲論文、一四七頁）即ち地表には天界及び地球内部の現象が作用すると共に、生物及び無生物がそれ等作用の下に共存して、無限の多樣性・複雜性・可變性が生じて居り、しかもそれは吾々人間の棲息する場所として當然に吾々の大きな關心の對象であるが故に、斯くの如き刺戟を吾々に與へるのである。尤も天界や地球内部に就いて同樣な關心が刺戟されなかつたのは、一部分それ等の領域に對する知識の不足に基くかも知れない。然し乍ら孰れにしてもそれ等の領域に於ける場所的差異は、地表に就いて吾々が地域を特に問題とすることを要求される程、多樣性・複雜性・可變性を持たないであらう。

第二に、地域の構成要素たる諸現象は、場所的な差異を持つ現象でなければならぬ。換言すれば場所・土地と關聯した現象でなければならぬ。植物の繁殖・成長・枯死の如き普遍的現象は、そのものとしては地理學的研究の對象とならず、諸地域に於ける繁殖・成長・枯死の狀態即ち場所的差異を持つ現象として見られる場合に始めて地理學的研究の對象となる。これは即ち場所との關聯に於いて見られた現象を意味する。斯かる現象の集積に依つて地域的差異が生じ地域が形成されるが故に、吾々は如何なる質のものが如何なる量に於いてまた如何なる形態に於いて分布するかを觀察するのである。

第三に地域構成の要素たるには、持續的・固定的に同一場所に分布する現象でなければならぬ。場合に依つては或る現象の缺除といふことが一地域の個性を形成するかも知れず、或はまた何等かの特定現象の常に斷續することが、その地域を特徴づけるかも知れないが、それ等の場合でも、斯かる事實が時間的に連續するものでなければならぬ。然るに如何なる現象でも、長期的な發展傾向を意味する變化や、短期間の循環的交代的變化或は不規則的偶

發的變化を示すし、且つまた多くの現象に於いて季節的變化が見られる。從つて吾々が諸現象の持續性・固定性を認識しようとするには、多くの場合に於いて特にそれが爲めに、何等かの作業を行ふ必要が起こる。地域的個性なる觀念には當然靜態的認識が含蓄されて居るのだから、諸現象の長期的變化はひと先づ考慮の外に置いてよいが、短期間の變化に就いては、それ等を貫いて見られる正常的平均的狀態を求めねばならぬ。例へば各地の氣候は、數年乃至數十年にわたる期間の年平均氣溫や同期間の各月平均氣溫或は降雨量等で表される。經濟現象にしても、一地域の特定生產現象が或る期內の平均的生產量で表されるが如きである。斯くして地理學的研究の對象たる現象は具體的には、或る期間內の正常的平均的狀態に於ける現象だと云ひ得る。一回きりの繰返しのない現象は、それ自體としては研究對象とならない。例へば一回の噴火はそのものとして研究對象とならず、他の噴火と合せ考察して噴火の頻度とか型とかを問題にする場合に、始めて吾々の研究對象となる。經濟現象に就いて云へば、一國內の市場へ他國から或る商品の巨額のダムピングが行はれて價格が暴落した場合とか、或はまた重要農產物の大凶作となつて該農產物の世界的値上りを齎し、他方農民は非常な收入減を見た場合とかは、孰れも臨時的な異常な現象であつて、地理學が本來關心を持つところではない。而して若しも吾々が長期間に於ける地域的個性の變化を問題にするならば、その場合に始めて諸現象の長期間に於ける變化が觀察される。即ち上述の如き短期間の正常的平均的狀態が時間的に相繼起し、一の狀態から次の狀態へ移る間に現れたる發展的長期的發化が觀察されることになる。

第四には群として見られた現象でなければならぬ。地域的個性を形成する素材としての現象は、地域內に於いて群をなせるものとして見られねばならぬ。例へば日本人は日本人として、その質に於いて量に於いて分布形態に於いて、日本なる地域の構成要素となるのだから、吾々は日本人の個々を通じて見られる通有性・平均的狀態を研究し、甲野太郎、乙野次郎なる個々人をそのものとして研究するのではない。吾々がそれ等個々人に關心を持つのは日本人なる群を形成する素材としてのみであつて、それ等個々人そのものとしてゞはない。同樣に吾々は日本の山の一つとして富士山に關心を持つのであつて、日本の山なる集團を離れて富士山に關心を持つのではない。吾々は人類の間に於ける日本人、世界の山の間に於ける日本の山に關心を持つと同時に、甲野太郎、乙野次郎等から日本人を、富士山その他の山々から日本の山を求めようとする。換言すれば吾々は、諸現象を地域といふ單位に基いて個別化すると同時に、その單位の內部に於いては普遍化を行はうとする。而してこの事は氣候現象のやうな物質の運動・變化の過程に屬する現象に就いても云はれ得ることで、一地域の氣候は、その地域內の細部分間に於いて種々の差異があるから、一地域の氣候を表現する場合には、それ等細部分を通じての正常的平均的の氣候を以つてするのである。また地形の如き物質の形態に屬する現象にしても同樣で、例へば二本の等高曲線間の傾斜地は、その間に高度の差が存するにも拘らず、中間的高度を以つてその地區全體の高度を表すが如きである。斯くして地理學的研究が、正常的・平均的狀態に於ける現象を對象とするといふことは、時間的な關係に於いても空間的な關係に於いても云はれ得る。（オツトーグラーフ著、國松久彌譯、地理學の概念、昭和五年刊、一〇六——一一六頁參照）

斯くして地理學的研究の對象は、右の如き性質を持つことに依つて、地域構成の要素となり、從つてまた地域的個

性の素材となる諸現象である。地理學的研究の對象領域はこゝにその限界を區劃される。然し乍ら吾々の本來の研究對象は、これ等諸現象の綜合體としての地域であつて、從つて右の如き性質を持つ諸現象を單にそのものとして研究するのではない。地域の構成要素としての諸現象を研究對象とするといふことは、常に地域なる全體との關聯に於いて考察することを意味する。何となれば個々の現象から構成された全體としての地域は、個々の現象が相互に作用し反作用して、その結果それ等構成要素の單なる合計とは異なるものとして構成される。又その反對に、個々の現象は斯くして生じた全體から制約を受ける。故に地域を構成する個々の現象は、常に全體との關聯に於いて考察されるのでなければ、吾々は地域的個性を正しく把握し得ぬ筈である。ところで綜合的全體としての地域は、勿論その諸特徴に於いてのみこれを知り得るのだが、その諸特徴はまた吾々の研究の結果として知り得るものである。從つて全體との關聯に於いて考察するといふことは、結局に於いて、個々の諸現象を同地域の他の諸現象との關聯に於いて考察することを意味する。

二、地理學的研究の課題――地域的個性の記述

地理學的研究は地域的個性を明かにしようとする。これは卿ち地理學的研究の究極目的であり、同時にその中心的課題である。換言すれば地域的個性を正確に把握し表現すること、これが中心的課題である。畢竟それは地域的個性の記述と說明に他ならない。こゝに謂ふ記述とは廣義に於けるそれであつて、地域的個性を文章・地圖・寫眞繪畫・統計その他の手段に依つて描き出すことを意味する。說明とは卽ち環境論的考察に依る地域的個性生成の過程の闡明である。從來各地方の事情を敍述するものを地誌 chorographie 又は chorologie と稱して來たが、地理學理論に從ふ地誌は、單純に各地方の事情を敍するに止まるものでなく、地域なる概念の把握の上に立つて各地域の個性を記述し、この個性生成の因果關係を明かにすることに努力するものでなければならぬ。この意味に於ける地誌は、正に地理學的研究の中心部分をなすものと云ひ得る。（註三）然し乍らこの因果關係の說明は、因果關係一般ではなく、地理的環境と地域的個性の形成要素との間の因果關係からの說明に主眼點を置かねばならない。（註四）

註三　ヘットナア（Alfred Hettner, Die Geographie. Ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden. Breslau, 1927. S. 121-5.）クラフト（Viktor Kraft u. Felix Lampe, Methodenlehre der Geographie. Leipzig u. Wien, 1929. S. 9）その他この見解をとる學者はかなり多いやうに見える。

註四、地理的環境と地域的個性の形成要素との因果關係からの說明でなければならぬといふ理由は、本誌第三十二卷第十一號所載の拙稿「地理的環境論の諸問題」に於いて、極めて不十分ながら述べて置いた。

次にこの地域的個性の記述とその環境論的說明との夫々の性質に就いて、少しく述べて見よう。先づ地域的個性を記述するに當つて、吾々は地域內の諸現象に就いてはこれを類型化する。例へば氣候は、海洋氣候・漸移氣候・大陸氣候等の諸型として表され、山脈は低山脈・中山脈・高山脈等の諸型として表される。それ等の氣候型・山脈型の夫々に含まれる細部の氣候・個々の山々の差異は、これ等類型の中に吸收されてしまふ。卽ちグラーフの言葉を藉りれば「現實在が大體の特徴に於いて單純化され、てあらはれ、且つまた概觀的にあらはれるがまゝの相に於い

て、それは記述されなければならぬのである。」（前掲書一〇七頁）他方に於いて、一地域と比較してその個性を記述しようとするに當つて右に述べた類型化は如何なる間聯に立つのであらうか。この點を考察する爲めには、先づ遡つて地域の性質・地域的個性探求の作業の性質等に就いて述べねばならぬ。

諸地域が全地表のうちから夫々その特定の面積を持つ地表部分として區劃されるのはそこに分布する無數の現象の間に何等かの統一性が見出され、それがその地域の個性を形成するからである。從つて逆に特殊性を同じくする地表部分の總體が一地域をなすと云つて宜い。して見れば、吾々が地域的個性を求めようとすることは、究極に於いて、地域を設定することに他ならない。例へば諸地點の氣候觀測の結果から、大體に於いて同じ氣候を有する地點を求め、それ等の地點を包容する地表部分を以つて一地域とする。その際、その特定の氣候といふ地域的個性の發見は、同時に地域の發見地域の設定である。即ち地域的個性探求の作業は、同時に地域設定の作業を意味する。地域は一地表部分に於ける諸現象の綜合體である。特定の類型に屬する氣候を以つて區劃された地域と雖も、勿論そこに多種多樣なる現象を分布せしめて居る。それにも拘らず、それ等無數の現象の間に、氣候現象上の劃一性に基いて統一性が生ずる。それは氣候が動植物界その他の現象に強力な影響を與へるが爲めである。

右に述べた地域は、何等かの種類の現象、例へば氣候現象・經濟現象・政治現象等の現象の劃一性の故に個性を有する地域であり、一地表部分には斯かる地域が多數複合する。而してこれ等地域の個性は、明かにこれを類型として表現することが出來る。その際、類型を表示する標識が多くなるに從つて地域の數は增加し夫々の面積は狹小となる。例へば氣候型の標識として氣溫のみでなく雨量をも併せ用ふる場合、或は更に風を併せ用ふる場合には、氣溫のみに倚據する場合に比して、孰れも地域數は增加し、夫々の面積は狹隘となるが、他方に於いてその地表部分の個性は、一層詳細に表現され得る。同時にまたその地域的個性の類型化にはより複雜な作業を必要とする。

斯くの如く地域は氣候現象・地形現象・經濟現象・政治現象その他種々の現象の範疇の夫々に就いて、これを設定することが出來る。更にこれ等のうち例へば氣候と地形・經濟と政治の如く密接な關聯にある二、三の範疇に屬する現象に就いて、複合的な地域的個性を見出し、それに照應する地域を區劃することも出來る。更に進んで自然現象の一切を考慮に入れた所謂自然地域なるものを區劃する試みも、幾多の地理學者に依つて行はれた。斯くの如く益々多種の現象を考慮に入れゝば入れる程、一地表部分の地域的個性は一層十分に表現されるが故に、そこに設定された地域は、單一の範疇に屬する現象からのみ區劃された地域に比して、地理學的破究の目的から云つて一層高い價値を持つことになる。斯くして遂に一切の自然及び社會現象の分布狀態を觀察して、最高度に複合的な地域の設定が着想される。斯くの如き綜合地域の個性を如何に表現するかと云ふに、その地域に於いて最も支配的な重要性を持つ型の現象に依つて表現するか、或は數多の範疇に分れる諸現象の夫々に就いて類型化を行ひ、それ等の類型の列擧を以つて表現するかである。前者の場合には、多種多樣の現象の中から最も支配的なものを選び出すといふ作業を行はねばならぬ。從つて例へば氣候現象に就いての類型化が一氣候地域を區劃した場合と、その類型化の意義が異なる。即ち例へば氣候地域の如く單一の範疇に屬する現象の類型化に依つて區劃された地域は、その類

型化の故に謂はゞ自働的に機械的に區劃され、その型の氣候を持つ地表部分が全部包容される。これに反して綜合地域の場合には、豫め諸種現象の間に選擇を行はねばならぬ。而して斯かる綜合地域の個性は當然に諸種現象の結合狀態の上に求められねばならぬ筈で、從つてその中から一、二種の現象を選び出しても、それがその地域の個性を表現するとは云へない。その綜合地域が他の綜合地域と異なるのは、假に一、二種類の現象に關して同じ型を示すとしても、他種類の現象に關して異なつた型を示すからである。だから綜合地域を對象としながらその個性を何等か一、二種類の現象を特徴として表現しようとしても、他にもその特徴を共通に持つ綜合地域があり得る。換言すれば斯かる方法に依つては地域的個性の表現は行はれず、せいぜい各地域の特殊性を或る程度まで示すに過ぎない。斯くして、綜合地域の個性は第二の方法に依つて即ち諸種現象の類型を列擧することに依つて表現されねばならぬ。

註五　J. F. Unstead, A synthetic method of determining geographical regions, The Geographical Journal, Vol. XLVIII, No. 3, pp. 235-7. 參照　こゝでアンステッドは、各地域に最も顯著にして他の諸現象に最も重大なる影響を與へる現象を以つて、地域的個性を示さうとする。例へば人口稀薄な地方に就いては自然現象を以つて、人口稠密な地方に就いては政治的及び經濟的諸要因を以つて各地域を特徴づけることを主張する。稀薄な人口を持つ地方の社會現象は自然現象に依つて重大な影響を受けるし、旺盛な政治活動及ひ經濟活動の行はれる地方では、これ等が逆に自然現象に重大な影響を與へるといふ關係が著しいからである。從つて地域區劃の境界としては、種々の標識が混用される。即ち森林高地に於いては地形が恐らくその地方の大部分に對して決定的要因であらうから、山麓の地形上の境界を以つて地域の一方の區劃を行ふ。又他の方面では寒冷或は寡雨の爲めに森林がその性格を變へ或は疎密の度を異にするとすれば、そこでは植物被の狀態に於ける境界線を以つて區劃する。また商工業地域では人口密度の高いことが最も重要な特色であるから人口密度の急激に低下する地帶を以つて境界とするのである。

ところで前述の如く地域的個性を見出すことは即ち地域を設定することである。多くの場合に於いて吾々の研究の結果でなければ地域は設定されず、研究着手の際には吾々にとつて地域は明白にされて居ないのである。然し乍ら我々の研究は必然に或る特定の地表部分に向けられるのであつて、斯かる特定の地表部分を限ることなく、何の根據もなく漫然と全地表の諸地點を取上げることはない。而してこの吾々の研究の向けられる場所として豫め區劃される地表部分が、何等かの個性を持つ地域だと想定される場合には、その地表部分は即ち研究の手續上假に設定された暫定的な地域である。だから吾々の觀察が進行するに從つて、その暫定的地域の境界が縮少される場合が生ずるかも知れないし、逆にその外部まで觀察を及ぼして境界を擴大する場合も生じ得る。

然るに吾々にとつて地域の境界が豫め與へられて居る場合がある。それは政治的境界殊に國家の境界である。この一國の國土から成る地表部分は、その中に分布する政治・經濟・宗教その他あらゆる種類の社會現象に對して、その地域に分布することの結果として、何等かの共通な特殊性を持たしめて居る。從つて一國の國土からなる地表部分は正に地理學上の地域を形成すると云ふべきである。（註六）

註六　然るに從來の地理學者にはこれと全く異なる見解を抱く者がかなりあるやうに見える。米國の或る地理學者は次のや

うに云つて居る。「地理學者は多種多樣の地域を用ひて作業するが、それ等の大部分は三種に大別される。即ち政治的・自然的・及び地理的の諸地域である。政治的地域は、すべての種類の統計が政治的區劃に基いて居り。從つて極めて取扱ひに便利である爲めに、先づ最初に用ひられた。然し乍ら、斯かる境界線は全く假想的であり人爲的であるが故に、それ等は『地理的憎まれ者』(geographical abomination) となり了つた。抑々ウッヅ湖以西のカナダと米國を分つて居る境界線にもまして人爲的な地域の境界線を想像出來やうか。この二國は自然的或は人種的のいづれの境界線に依つても分けられて居ないのである。」(C. Langdon White and George T. Kenner, Geography. An introduction to human ecology. New York, 1936. p. 674) 然し乍ら、人種が同じであつても自然的條件が違はなくとも、境界の一方の人間はカナダ人であり、他方は米國人である。而してこれに附隨する幾多の重要な差異が兩地間に見られる。これ等の差異を齎して居るのは國境線であり、從つてそれは立派　實在的な線である。人爲的であらうとなからうと問題ではない。また地理學者が往々にして自然的境界を過重視することは、例へば次の如き輕卒な提言を生むことがある。即ち「ボヘミア高原の境界線は自然に依つて極めて確定的に形づくられて居るからボヘミア居住の獨逸人を獨逸國家内に收容することは殆ど不可能事に見える。」(Samuel van Valkenburg and Ellsworth Huntington, Europe. New York, 1935. p. 505.) これはボヘミアを獨逸領と化してそこに居住する獨逸人を獨逸國家内に收容するといふ意に解せられるが、その事實はこの書出版の後、僅々數年にして實現してしまつた。

斯くして政治的地域を對象としてその地域の個性を觀察する場合には、吾々にとつて地域が與へられて居るが、他の場合に於いては地理學的研究は常に暫定的な地域を用ひて作業せねばならぬ。島嶼地形の如きですら、それに

近接する島嶼或は陸土と共に觀察した後でなければ、果してその島嶼が一つの地域をなすや否や不明である。吾々が斯くの如く暫定的な地域に基いて觀察を行ふとすれば、そこに何等かの特殊性が見出されたところで、それが果してその暫定的地域の個性であるかどうか、從つてまたそれを以つて最後的に地域を設定し得るかどうかは、不明な場合があるであらう。政治的地域の場合を除き他の諸種の地域に就いては、全地球表面の觀察が終らぬ限り、各暫定的地域に見出される特殊性を以つて地域的個性となし得るや否やを決定することは出來ぬ場合もあるであらう。斯かる場合に吾々の研究の直接目的は、その暫定的地域から何等かの特殊性に依つて統一された地域を見出すことだと云へやうしかもこの地域は嚴密に地理學的な地域でないことは云ふまでもなからう。

暫定的に地域を區劃する方法は多種多樣である。何等の文獻的資料のない地方に就いては、實地調査の及んだ範圍が恐らく暫定的地域となる。然し現在では全地表にわたつて全く何の文獻的資料もない地方は殆ど皆無であらうから、斯かる資料に基いて區劃する場合が多い。その場合、區劃の基準としては、氣候・地形の如き自然的要因、或は人種・民族等の血族集團や、或は言語・宗教等を共通にする集團その他種々の社會的要因が用ひられる。またこれ等以外に純粹に形式的な基準例へば一地點を中心とした或る半徑の圓とか、或る高度の土地とかを用ふる場合もあり得るし、更に一地點から等時間距離の場所を區劃すると云ふ場合もあり得る。政治的地域にしても例へばその地域に於ける文化の型を研究しようとする場合の如き、果して特定の文化の型の分布範圍がそれと一致するか否かが不明な以上は、暫定的な地域として用ひられるわけである。すべてこれ等の區劃は、その場合々々の研究題目

の如何に從つて取捨選擇されることは云ふまでもない。而してこの研究題目は、それ等の地域に於ける地域的個性乃至は特殊性の考察である場合と、環境論的考察の一手段として一地域内に於ける二現象間の關係を觀察する場合と二種類に分れる。

右に述べたやうな最後的な或は暫定的な地域に於ける諸現現の分布狀態を觀察し、各地域の個性乃至特殊性を見出さうとする。然らば地域的個性乃至特殊性は如何にして觀察されるか。元來それは、量または形態に於いて他地域に比し特に顯著な分布をなす現象に依つて形成されて居る。分布の量とは即ち分布の頻度及び密度である。他地域に比して特に高い頻度又は密度を以つて分布する場合のみならず、零又は極めて低位の場合でも、地域的個性又は特殊性の素材となり得る。但し後者の場合は、他地域に通常高き頻度又は密度を以つて分布する現象に限るのであつて、消極的な意味に於ける地域的個性の素材となるものである。分布の形態とは、一つの群に屬する個々の現象或は二つ以上の群に屬する個々の現象が、一地域内に於いて占める位置の相互間の空間的關係である。例へば個々の家屋からなる聚落の形態（大小・形狀・密度）とか、耕地・道路・聚落の配置狀態から成る農村の形態とかの如きである。他地域に比して諸象現が特異な位置關係に於いて分布する時それはその地域の個性を形成する素材となり得る。

註七　辻村太郎、文化景觀の形態學、地理學評論、第六卷第七號、六五七―六八九頁參照。但し同論文に於いて、分布の形態なる概念が斯く一般的に用ひ現されて居るのではないことを斷つて置く。

地域的個性乃至特殊性は、諸現象の分布の量及び形態を觀察し、これを他地域と比較することに依つて明かにされる。その際、そこで觀察さるべき現象に就いては、豫め選擇が行はれねばならぬ。この選擇は或る程度まで觀察の目的に依つて制約される。例へば一地方の自然現象に就いての特殊性を明かにせんとする場合、觀察は當然に自然現象に限定される。然し乍らその場合、自然現象のうちで如何なる部分に觀察が向けらるべきかは、畢竟觀察者の判斷に依つて適當に選擇される他はない。まことにグラーフの云ふ通り「科學的活動に從事せんが爲には特別なる訓練を必要とするものである。而してこの訓練こそ正しく、當該科學にとつて」從つてまた特定の研究作業にとつて「本質的であるところのその諸々の事實竝に關連に關する觀察力を鋭敏ならしめるものである。」（前揭書、七四頁）地域的個性が最後的に確認されるのは、他のすべての地域との比較がなされた後でなければならぬ。然らばこの比較の準備として他のすべての地域に就いても同樣な觀察を行ふ必要があるかと云ふに、勿論多くの場合に於いてさうではない。こゝでも右の如き訓練された觀察者の能力が、人類が昔から蓄積して來た知識に基いて、比較的容易にこれを行ひ得るのである。

さて以上の如くして各地域の個性乃至は特殊性が把握された時、それは文章・地圖・繪畫・寫眞・統計等の手段に依つて記述されるのであるが、それと同時に、近似した個性を有する他の地域と共に類型化せねばならぬ。換言すれば甲乙丙等の地域が相互に近似した個性を持つ場合、それ等地域の本質を表示する理想型としての類型を作り、それ等の個性又は地域をこれに屬するものとして記述せねばならぬ。蓋し吾々が個別者を認識するのは、一般

者の認識に基くが故であつて、具體的には、この類型に各地域の特殊性情を添加して記述することに依り、各地域の個性を一層明瞭になし得るのである。而してこの種の類型は、これと近似する他の類型と共に、更に高次の類型に所屬せしめらるべきである。斯くして地理學的研究は、地域的個性の闡明といふ中心課題を果す上に於いて、地表部分の個別化的研究を行ふが、同時に地域の類型化に依つて、一般化的研究も行ふ。前述の如く地域的個性の最後的確認は、他のすべての地域との比較の後に始めてなされるのであつて、觀察者の能力に倚頼するのは、云ふまでもなく便法に過ぎない、嚴格な意味に於ける地域的比較は、この地域の類型に依つて行はれ、從つて地域的個性の確認も亦これを俟つて始めて正式に行はれる。斯くして地理學的研究は、地域內部に對して諸現象の地域的類型を求めると共に、地域外部に對しては、地域の類型を求めるのである。

以上に於いて、地域的個性の記述なる課題の意味を大體述べ了つた。吾々は地域をその構成要素たる諸現象に分析し、それ節の量的及び形態的分布狀態を客觀的に觀察し、地域的比較に基いて、地域的個性を記述せねばならぬ然るにこの分析的客觀的研究方法は、現實在の認識方法として一つの重大な缺陷を持つ。即ち斯かる研究方法に依つては、地域をその全體性に於いて十分に把握することが不可能である。この意味に於いて景觀論と藝術的表現論とは注目されねばならぬ。

抑々景觀とは「獨逸語の landschaft に對して、植物學者の三好博士が與へられた名稱である。地理學で此の言葉を用ゐ始めてから已に二十年ほど經過して居るが、學者によつては可なり多くの意義に使用して居て、正確な定義は未だ決定して居るとは云へないが、大體に於て眼に映ずる景色の特性と考へて差支ない。ドイツの地理學者の中に景觀地域（landschafts gebiet）を景觀と呼ぶ人も少くない」（辻村太郎著、景觀地理學講話、昭和一二年、一頁）のであるが、要するに「その本來の意義は風景であり景色であつて、視覺によつて認められる陸面の形態である。」（辻村太郎著、景觀地域、岩波講座地理學、昭和八年、九頁）景觀記述を以つて地理學の本體とする人々は、視覺聽覺・嗅覺等の感覺に依つて風景を記述する。（同所、二頁）これは視野に入り込む範圍の地域を全體として把束する一つの方法であり、斯かる小區域を生物體の細胞に比すべき地理的細胞と考へるならば、それ等の綜合に依つて、より廣い地域の考察を行ふことが出來る。（辻村太郎著、景觀地理學講座、昭和一二年、一―二頁參照）この方法に據る時は、視野に入り得る小地域を記述する限りに於いては、上述の如き分析的方法の缺陷を補ひ得るであらうが、地域的個性の說明を行ふが爲めには、景觀をその構成要素に分析することが必要になる。また小地域の景觀をより廣い地域に綜合する爲めにも、斯かる分析に基く綜合が行はれねば、個々の小景觀地域の記述の單なる集積があるばかりで、その大景觀地域の全體としての把握が不可能である。その場合景觀論者にとつても必要なのは「諸種の景觀及び其の要素の成因的分類を行ひ、其の發達過程に基いて說明的記載を試みる事」（景觀地域一一頁）に依つて、景觀の系統的認識を得ることである。更にまた景觀論的記述は、諸現象の形態的分布の觀察には適當して居るが、量的分布を正確に觀察し記述することは出來ない。斯くして景觀論的研究は幾多の長所を持ち、吾々にとつても價値の高い成果を擧げては居るが、右の如き理由に依り、その立場そのものを全部的に容

認するといふわけには行かない。

次に藝術的表現論は Ewald Banse の主張するところであつて、彼は地理學を以つて科學と藝術の中間にあるものと考へ、分析的客觀的觀察と共に綜合的藝術的表現が必要だと說いて居る。彼に從へば地理學の仕事は「先づ第一に國土を觀察すること即ちそれを結合體なる全體のまゝに把握すること、さうしてから始めて國土の理解へと進む、即ち國土をその諸要素及びそれ等の間の因果的に基礎づけられた相互關聯性に於いて究明し、最後に斯學はこの認識を一つの新しき明晰に仕上げられた全體像に凝縮せしめる。この目的を果す爲めに、地理學は單に悟性と觀測する眼とを以つて作業するのみでなく、感覺と直感に依つて觀る眼とを以つて作業する。」(Lehrbuch der organischen Geographie, Berlin u. Leipzig. 1937. S. 29) それ故に彼はその地理學を構成的地理學 gestaltende Geographie と呼ぶ。而して感覺と直感に依つて觀る眼とを以つて作業し、國土を新しき全體像として作り上げることは即ち藝術的表現を意味する。

確かに藝術的表現は、それが滿足に行はれゝば、科學的研究の成果を補足し得るであらう。然し乍らグラーフも指適する如く、豫め地理學的訓練を經て居ない者が、斯かる適切な藝術的描寫を行ひ得るか否かは頗る疑問である。また藝術は常に個性的であり決して一般に敎え得べきものでもないし、更にその表現が相手方の觀賞能力に從つて種々樣々に受取られるといふ缺陷を持つ。斯くして藝術的表現が確かに有用であるとしても、吾々は先づ第一に客觀的分析的方法に據らねばならない。(グラーフ、前揭書、七八—八五頁、一六八—七四頁、小原敬士著、社會地理學の基礎問題、昭和一一年、一一三—五二頁參照)

三、地理學研究の課題——地域的個性の說明

地理學的研究は、地域的個性を記述すると共に、それに對して說明を與へねばならぬ。而してこの說明は、地域的個性と地理的環境との關聯の考察の中に求められねばならぬ。地理的環境の概念に就いては、既に他の機會に述べた。(註六)それが各地域に於ける諸現象の分布に如何なる影響を與へて居るか、從つてまた地域的個性に如何に影響して居るかの考察が、環境論的說明の內容である。斯かる說明が行はれて、始めて地域的個性の正しい把握が可能となる。而して綜合地域の個性はそれを形成する諸事實の列擧に依つて表現されねばならぬこと、前節に述べた通りであるが、若しも環境論的說明が行はれぬならば、その列擧は單なる列擧に終り「地理學の本質は單に並置すること (Nebeneinanderstellung) と蒐集すること (Kompilation) のうちにのみ存在し得ることゝなる」(グラーフ前揭書、一四八頁) 危險に陷る。環境論的考察に依つて、そこに列擧される諸事實相互間の關聯が明かにされねばならぬ。然らば何故環境論的考察が斯かることを可能ならしめるかと云ふに、それ等の諸事實は共通なる他の環境要素から影響される關係にあるか或はその一方が他方に對してその環境要素の一部を構成する關係にあるか、この二重の關係或はその一方の關係を必ず持つて居る。從つて環境論的考察に依り、これ等諸事實は單に列擧されるのでなく、その間に關聯あるものとして示されると共に、その關聯が如何なるものかをも示されるのである。

斯くして環境論的考察は、地理學的研究の重要部分をなすのではあるが、環境論的考察そのものが直ちに地理學

的研究の本體でないことは、上述し來つたところから明白であらう。然し乍ら、斯う云つたからとて、從來の地誌的研究のみが地理學的研究の本體だとは考へられない。單純な記述に過ぎぬ地誌は勿論のこと、因果關係の考察に基いて地域的個性に說明を與へようとする見地の地誌的研究も、そのものが直ちに地理學的研究の本體ではない。環境論的考察に基く地域的個性の說明を行ふ地誌的研究、即ち從來の地誌と環境論的考察との兩者が合したものにして、始めて地理學的研究の本體をなすと云ふべきである。然るに所謂人文地理學に於いては、特にラツツエル以後、環境論的考察が優勢を占め、中にはこれを以つて地理學の本體なりとする見解も現るゝに至つた。この人々の大部分は、地理的環境を以つて自然的環境と同一視し、要するに自然と人間との關係を考察することが地理學の任務だと考へた。經濟地理學の分野に於いては、例へばディートリッヒ等の交互作用の理論の如く洗錬された形をとつては居るが、やはり環境論的考察を以つて地理學の本體とする見地をとるものである。（註七）この見解には同意出來ぬとしても、これ等の人々の研究が地理學の進歩に極めて大なる貢獻をなしたことは忘れてはならない。

註六　前掲拙稿「地理的環境論の諸問題」參照。

註七　人文地理學の方面に於いては例へばハンテイントンの次の如き言葉を擧げることが出來る。「世界到る處、相異なる場所の住民は、外貌・服裝・行動・思想を異にする。（中略）これ等の差異が人文地理學の研究題目である。それ等は概ね地理的外圍 geographical surroundings ―より學術的な用語で云へば、自然的環境 physical environment の差異から生ずる。故に人文地理學は地理的環境の人間活動への關係の研究として定義されやう。」（Ellsworth Huntington and Sumner W. Cushing, Principles of human geography. 2nd ed., New York, 1922. p. 1）ディートリッヒとその他の所謂交互作用の理論に就いては、佐藤弘著、經濟地理學總論、改造社版、昭和八年、五七―一二一頁參照。

さて地理的環境と地域的個性の關係を考察するのは、諸地域間の個性の差異が根本的にはそれ等地域を異にすることから生じると考へるからであつて、即ちこの兩者の關係を因果關係と見るのである。從つて當然そこに何等かの合法則性の存することが考へられる。然らばこの合法則性から更に歩を進めて、この二つの間に因果法則が定立されるであらうか否かゞ問題である。若しも吾々が、一定の地理的環境の下には一定の地域的個性が結果するといふ不變の關係や、或は地域的個性が一定の狀態から次の狀態へ移行して行く過程に就いての普遍妥當的な法則を定立し得たならば、吾々は特定の地域的個性を、それが單に現在ある儘の相に於いて知り得るのみならず、更にその將來の豫見を行ふ重要な手掛りをも得るに至るのであつて、それでこそ始めて地域的個性を十分に知り得ると云ふべきである。またこれ等の法則を定立しそれを適用することに依つて、地域的個性の考察は一層的確に行はれ得ることになる。まことに法則の定立に依つて、斯學の對象領域に於ける普遍的諸關係を明かにし、それに依つて「未だ經驗せられざる對象の認識を支配し、之を分類し、又その性質を豫期せしむる」（田邊元著、科學概論、大正七年二二三頁）ことに努力することが必要であり、斯くしてこそはじめて地理學は、完全な意味に於ける科學となり得るのである。だがそれは果して可能であらうか。

上述の如く地理學的研究の對象は、一地表部分に於ける諸現象の綜合體としての地域である。この地域を形成す

る諸現象は、相互に緊密なる關聯の下に所謂地的統一 Unité terrestre をなすものと解される。即ち「地球を以つてその諸部分には整然たる秩序が保たれ、そこに諸現象は互ひに關聯し合ひ、特殊的な事例を規定するところの普遍的法則に從つてゐるやうな、一つの全體として解する觀念」（ヴイダル＝ドウ＝ラ＝ブラーシュ、飯塚浩二譯、人文地理學原理、上卷、昭和一五年刊、四一頁）は、斯かる綜合體としての地域の觀念を生ぜしめるのであり、當然そこに合法則性が認められる。然し乍ら、その間から他の自然及び社會諸科學の領域に屬する因果法則の他に、右に擧げたやうな地理學的法則を定立し得るであらうか。

これに對して決定的な答を與へることは出來ない、と云ふのは法則定立の論理的な可能が信ぜられると共に、その實際的な困難が理解されるが爲めである。然らば何故に法則定立が可能か。元來、或る特定の地理的環境と地域的個性との因果關係は前提に從つて、その特定の地理的環境と地域的個性との關係に限られる一回的の因果關係であり、地域的個性が時の經過と共に變化する以上は、一回的一時的の因果關係である。從つてその間から、他の場合にも妥當し得るやうな法則を見出すことは出來やう筈がない。然し乍ら前述の如く地域的個性は類型化されねばならぬ。斯かる類型化に依つて、その類型化に屬する個性を持つ限りの如何なる地域にも妥當し得る法則が見出され得る筈である。即ち特定の類型に屬する諸地域の個性とその環境との關係を考察した結果として、特定の型の地理的環境に依つて、特定の型の地域的個性が生ぜしめられるといふ法則が立てられ得る。これこそ正しく地理學的な法則と稱さるべきである。尤も地域的個性を形成する諸現象が單に環境から一方的な影響を蒙るのみでなく、逆に環境に影響を與へる場合もあり。從つてこの兩者の關係は、極めて複雜である。然し乍らそれ等複雜な要因の重要なるものは、全部これを考慮に入れ、その結果として、特定の型の地理的環境の下には特定の型の地域があるといふ法則を定立する。斯かる法則は、その適用に依つて個々の場合に對する理解を容易にし更に將來の豫見を行ふ爲めの重要な手掛りとなる。

また斯かる法則と異なつて、地域的個性が特定の狀態から變化して次の狀態へ移るその過程に關する法則も考へられ得る。然し乍ら地理的環境は、シュリューターの云ふ通り「創造するものではなく、限定するもの變化するものである。」（綿貫勇彥著、地理學方法論、昭和十年、四四頁）それが地域的個性を生ぜしめるのは、一地域に於ける諸現象の分布狀態を他地域と異ならしめ、從つて他地域と異なる個性を持たしめるからである。從つて地理的環境から地域的個性への一方的關係を考察するのみでは、後者の變化に對して何の說明も與へ得ないことは當然である。然し乍ら地理的環境と地域的個性從つてまたその地域に於ける諸現象の分布狀態との相互的な關係を觀察し、諸現象の分布狀態に依り環境が影響を受けて變化し、その變化した環境が更に諸現象の分布狀態を從つてまた地域的個性を變化せしせるといふ過程に於いて、地域的個性の變化に關し普遍妥當的な法則を樹立することが可能であると思ふ。（註八）

註八、この問題に關してはウイツトフォーゲル（川西正鑑譯補「地理學批判」昭和八年刊、參照）及び江澤讓爾氏（經濟立地學―その論理的構成―昭和十年刊）の企圖が夫々注意さるべきである。

斯くして地理的環境と地域的個性との關係に就いて法則定立の可能なることが考へられるが、然らばそれが實際的にも可能かと云へば、不可能でないとしても不可能に近い程度に困難である。何となれば、地理的環境と云ひ地域的個性と云ひ、孰れも多種多様の現象から成る綜合體であり、兩者の關係は複雜を極める。環境を構成する諸要素には多種の現象に對する夫々の環境に共通に含まれ、且つまたその影響が根本的なものがある。氣候・地形とか一地域の經濟的發展水準・交通施設とかの如きがこれに屬する。然し乍らこれ等のうち最も根本的な要因として作用すると看做されるものを選び出して、一元論的に演繹的に因果關係を考察することは勿論誤りであり、右に擧げたやうな數種の要因に基く多元論的考察でも十分ではない。元來、環境とはそれに依つて圍繞される特定現象にとつての環境であつて、一地域の個性を形成する素材としての諸現象は夫々の環境を持つ。即ちAなる現象にはA'なる環境があり、Bなる現象にはB'なる環境がある。然るに若しもAとBとが、一地域の農業と工業の如き相互に密接な關聯に立つ現象であつたとすれば、當然にBはA'の一部となり、AはB'の一部となるであらう。孰れが環境要素としてより重要であるかは、個々の場合の事實關係に依つて認定することを得るが、斯かる相互關係は常に存在する。して見れば一地域の個性を形成する諸現象の環境は、そのかなりの部分がそれ等諸現象自體だといふことになる。然し乍ら若しも事實關係がさうであつたなら、勿論斯かる説明もやむを得ないのであつて、強いて環境と地域的個性を單純に對立する別個のものの如く考へることは誤りである。これはまた環境論的考察のみを以つて説明を完成し得ぬ所以でもあるが、それはさて措き右の理由により、一元論的な考察はもとより、多元論的考察にしても、或る特定の幾つかの環境要素を限つてそれのみを環境と看做す考へ方も正しくない。

地理學的法則はこの複雜極まる地理的環境と地域的個性との關係の中から見出されねばならぬのである。若しもこの複合的な關係の中から、何等かの單純な關係を抽出して、法則を定立するならば、それは地理學的法則に非ずして、何等か他の科學領域に屬する法則となる。例へばハンテイントンの研究した氣候と人間能率の關係の如き、假にその説を正しいとしても、それは一つの生物學的法則である。デーヴィスの侵蝕輪廻は地形學上の法則であり、ヴェーバーの立地法則は經濟學的法則である。地理學的法則は、これ等自然科學的及び社會科學的法則の複合からなる別種の法則でなければならぬ。（註九）自然現象に關する地域的個性を扱ふべき自然地理學が、現在では事實解體したと云はれるのは（註一〇）それが個々の專門的自然諸科學上の法則を樹立することに終り、それ等の複合としての地理學的法則を考察しなかつた爲めだと考へられる。（註一一）地域的個性と地理的環境との關係に就いての靜態的法則でも、その定立は斯かる困難が伴ふ。ましてやその動態的法則の樹立が困難なのは云ふまでもなからう。靜態的法則の場合には、夫々の類型に就いてその環境との關係が求められるのであるが、動態的法則の場合には、すべての類型の地域を通じて妥當する法則が求められねばならぬからである。

地理學的法則は斯くの如くその定立が困難なばかりでなく、假に法則が定立されたとしても、それに基いて或る特定の地理的環境からその現在或は將來の地域的個性を知るといふことは、實際上困難であらう。何となれば各地域の特殊性は理想型としての類型とは事實上異なるものだからである。斯くして吾々は事實關係の觀察と記述を第

一の仕事となすべきである。而して地理學的研究の究極目的が地域的個性の闡明にありとすれば。地域的個性生成の事實關係の間から抽象に依つて法則を定立することは、その本來の課題ではない。從つて右の如き法則定立の困難は、地理學的研究の生命を傷けるものではない。唯〻法則が定立されたならばその利益は疑ふべくもないのだから、地域的個性の記述及び說明を第一の課題とすると共に、法則定立の努力を忘れることは出來ない。

註九　オットー＝マウルが人類地理學的法則として擧示して居るものも、こゝに謂ふ地理學的法則ではない。それは地表に於ける人類及びその活動の分布に就いての諸原則であり、從つて地理學的研究の基本的準則とも云ふべきものである。即ち第一の「因果の法則」das Gesetz der Kausalität は、地人間の關係の中に創造者の意志に依つて定められた目的を見る見地が自然科學的考察法に依つて征服され、その結果として人類地理學的現象を豫定された活動として受取らず、その活動の現實の狀況をたづねる方針がきまることを述べ、地人間の因果關係にも、物理化學的・生物學的・心理學的因果律が作用することを指摘する。第二の「中間項の意義の法則」das Gesetz von der Bedeutung der Zwischengglieder は、自然景觀及び文化景觀から人間〻び人間活動への影響は、大部分何等かの中間項を通ずる間接のものであるとし、第三の「關係變化の法則」das Gesetz der Veränderlichkeit der Beziehungen は、自然そのものも變化するし、人間及び人間の文化能力にも變化が生ずるから、景觀の人間に對する關係は永く不變では居ないとする。第四の「發展の法則」das Gesetz der Entwicklung は、人類の進步發達の過程に於いてひとたび形づくられた人造物は、たとへその生成の動機が失はれても一般にその後まで存續するが故に、過去にまで遡つて原因を探究することが必要であるといふ。第五の「移行及び引用の法則」das Gesetz der Wanderung und Entlehnung は、人間及び文化の地域的移動と傳播の故に、一地域の文化は錯雜せる狀態をなすことを示し、最後に第六の「地理學的作用の交互作用と統一の法則」das Gesetz der Wechselwirkungen und der Einheit der geographischen Wirkungen は、景觀から人間への影響のみでなく人間から景觀への影響もあるが故に、この交互作用と斯かる關係から生ずる統一とを認める必要があると云ふ。要するにこれ等の「法則」は、すべて地理學的考察の準則として忘れられぬものであるが、吾々の謂ふ地理學的法則ではない。（Otto Maull, Anthropogeographie. Berlin u. Leipzig 1932. S. 10-15. 辻村太郎・山崎禎一譯述、人文地理學、昭和一〇年、五―一三頁參照）

註一〇　「今日にては自然地理の廣野は殆んど新興諸獨立科學の爲めに分割され、自然地理學として體系上何等獨自の領域を有するものがない。或は已むを得ず此等分立せる諸科學を連衡せしめて一體系を作らんとしても、畢竟これ等諸科學の通俗化、集團化に終り、一種のモザイック的作品となるに過ぎず、到底一科學として認めるべき資格がない。夫にも拘らず第十九世紀以後今日の地理學者と雖もこの分立化によりて既に解體せる自然地理學を再び盛り返さんとする無用の努力が行はれ、又行はれつゝあることは寧ろ怪むべきことである。」（石橋五郎、我が地理學觀、地理論叢、第一輯、昭和七年三頁）即ち人文地理學と對立するものとしての自然地理學は、事實上解體したのみならず、その存在理由を否定されるのである。

註一一　この意味に於いて所謂自然地理學及び人文地理學の方法上の差別は認められない。石橋教授の否定されるやうな自然地理學は存在し得ぬが。自然現象の地理學研究は存立し得る。またグラーフが地理學を一般地理學と特殊地理學とに分ち、前者を以つて自然科學となしたことも、過去の地理學に就いては妥當であるとは云へ、吾々の場合では通用しない。（グラーフ、前揭書、第三部、參照）